

## 論文要旨

周知のように、中国には 56 の民族、55 の少数民族が居住している。中国の学者たちは、これら 56 個民族が歴史的に存在していた民族と強調している。実は、これらの 56 個民族は中国の政府の行った「民族識別工作」（民族としての弁別と認定）という作業によって形成された民族である。筆者はこのような識別工作を通じて、国家に認定された人々のグループを漢語の読み方でルビを振って「minzu」と呼んでいる。

本論文における達斡爾民族はこのような識別された民族である。達斡爾民族は識別される前には、ダフル人と呼ばれた。

今、達斡爾民族の人口は、中国の 2010 年の人口調査によれば、13 万 992 人である。主に中国の内モンゴル、黒龍江、新疆に分布している。モリダワー達斡爾族自治旗は達斡爾民族の唯一の自治地域である。達斡爾民族の生業形態は多様で、農業主として、狩猟、牧畜、漁業、林業も行っています。地方によれば、エヴェンキ族自治旗では牧畜以外には、ほかの居住地域はほとんど農業主としている。言語は達斡爾語で、モンゴル語族に含まれている。中国における漢語化の傾向は彼らの内にも見られる。

筆者は中国における民族が、どのような依拠や根拠によって、どのようなプロセスによって民族と識別されたのか。識別された側にはどのような動きがあったか。彼らのアイデンティティにはどのような変化があったかという問題意識を持って、ベネディクト・アンダソンの想像の共同体論とエリック・ホブズボウムの伝統の創造論を作業理論として、識別された民族の側も「“民族の創造” 行為」に積極的貢献を果たしたことを実証しながら、中国における民族は、その内外の共同の力によって形成されてきたという観点を出した。本研究は、文献資料の分析、フィールドワーク調査と比較研究という三つの研究方法を使用した。

本論文は「識別された民族」を切り口に、達斡爾民族のアイデンティティに関する研究に取り組んだ。序論、本論、結論、参考文献、付録から構成されている。

序論では、問題意識と研究目的、作業理論、先行研究、論文構成について検討を行っている。

第 1 章では、本論文全体の背景ならびに考察のきっかけとして、まず、中国の民族識別工作の四つのプロセスのうち、第一段階に含まれている、一連の活動が、少数民族地域において、その後続く民族識別作業への雰囲気醸成する役割を果たしたことを特筆した。さらに、中国の識別工作の基準では、共通の言語、共通の地域、共通の経済生活、共通の心理要素という四点の特徴以外、民族と識別される側の意願が持つ重要性をも特筆した。

次に、達斡爾民族識別以前のダフル人の民族識別までの動向、識別されたプロセスに関する考察を通じて、ダフル人が達斡爾民族として識別されたことにおいては、中央政府による民族政策の実行以外の部分で、ダフル人のエリートたちが大きな役割を果たしたことを力説した。

第2章は、民族として識別された後の達斡爾民族の政治的創造と文化の創出及び伝統化について考察を行った。民族の創造は文化大革命によって時期を分かって、前半は1950年代から1960年代まで、後半は1970年代末・80年代から現在までである。つまり、二つの時期では国家は、達斡爾民族という名称と、それが存在するための達斡爾民族の場所を与えたということである。これらは、達斡爾民族の名と場所にふさわしい実体的要素を納めるための「器」のようなものを作ったことを明らかにした。

民族文化の創出とは、上に述べた「器」に収める実体的要素に他ならない。これら要素は学者、民族文化幹部が組織・実行した民族文化活動において応用（実用）され、それは今もなお変わらない。

一方、1980年代から、民衆は政府が開催している民族文化活動に参加しはじめた。今では、彼らはインターネットでも、民族文化の交流を広範に展開するようになった。つまり、1950年代に達斡爾民族が識別されてから今日に至るまでの60年間を経て、達斡爾民族は民族の内実としての民族伝統文化を持つ民族となることに成功したのであったことを明らかにした。

第3章は、達斡爾民族のアイデンティティについて検討である。まず、ダフル人の書いた文献資料と今の達斡爾民族の老人に対して行ったインタビュー内容の分析によって、清朝の時のダフル人エリート知識人には「ダフル・ソロン」というアイデンティティがあったことが判明した。また、民国・満洲国期のダフル人のエリート知識人たちには、ダフル人というアイデンティティとモンゴル人というアイデンティティが重層化しているアイデンティティがあった。

新中国で民族識別工作の展開に伴い、ダフル人幹部の中には民族というアイデンティティが萌芽始めた。識別される前のハイラルのダフル人には複数のアイデンティティが存在したのである。今では、達斡爾民族人には民族呼称、民族文化によって民族としてのアイデンティティが形成したことを明らかにした。

結論の部分では、論文の内容のまとめと本論文における理論的意義を討論した。

中国の少数民族は、ふたつの「そうぞう」の繰り返しが大きく作用している。筆者の研究で明らかになった過程を単純化して述べよう。中央からの働きかけ（民族政策・民族工作）によって、識別される側は自分たちは何らかの共通性を持った集団である民族であると「想像」する。そしてその「想像」を中央政府と識別される民族側のエリートが識別活動を通じて「創造」して実現する。このような「想像による創造された共同体」である民族は、民族名称と民族自治地域を有するので、その名称と地域の地理的特性からイメージされる文化的特長を帯びた存在であると「想像」され、学者・知識人・幹部が民族の歴史・文化・伝統を「想像」通りに「創造」し、民族の伝統文化を獲得する。民族としての名実ともに想像され創造された。これが民族なのである。

本論文で作業理論として採用した、ベネディクト・アンダーソンの想像の共同体論とエリック・ホブズボウムの作られた伝統論を踏まえて、筆者は、中国における少数民族とは、

民族識別をきっかけとして獲得した民族名称と民族自治地域、この二つに相応して想像され創造され伝統化された民族文化、さらに民族名称と民族文化によって形成されている民族としてのアイデンティティを持っていると想像する人々が創造した共同体、さらに端的に言うならば「想像と創造の共同体」である、と定義する。言うまでもなく、「漢民族に比して人口が少ない」ことがこれに加わる。重ねて強調しておきたいのは、中国における民族の創造は、政府による政策を通じての創造なのではなく、政府による識別を通じ、民族側の人々が創造した民族文化を通じての創造なのであるという点と、創造の結果として、民族としての実体がそこにあるという点である。

一方、中国のマジョリティである漢民族については、本論文での考察の範囲外に置いた都合上、厳格な定義には至ることはできないが、上の少数民族の定義との顕著な差異を明確にしておけば、民族自治地域を有しない点が異なることだけは挙げうる。

このように、本論文で提示した定義は、中国の一少数民族のみを事例にしたものであり、マジョリティとしての漢民族、そして達斡爾以外の少数民族や、民族として識別されていない集団をも視座に入れた検討を行っていない以上、広く中国全体の民族論としては不完全な段階にあることは、筆者自身が十分に自覚しているところである。しかしながら、本論文での到達点は、筆者独自の中国の民族論の完成に向けての出発点を明示していると捉え、広義の中国の民族論は今後の筆者に課された課題としておきたい。

もう一点、筆者が自覚している課題として、ここまでの、中国における民族、とりわけ少数民族の創造に関する研究に基づいて、中国という多民族国家における国民形成の問題にも取り組めるのではないかと考えている。なぜならば、多民族中国における国民の形成は、国民の形成と、その国民を形成する民族の形成があるからに他ならないからである。

論文の最後では参考文献と調査地の地図を付録した。

本研究は以上の学者たちの研究を踏まえて、中国国内の研究者たちの中国の民族は太古からあった民族であるという観点を批判して、民族とは想像され創造された人々の共同体であるという定義を試みる。民族の創造とは、日本の学者たちの提示した国民統合の為に上から作ったという観点をも批判して、民族の創造は上の政策の動き以外には、民族側の力も無視できないことを強く主張する。これが成功裡に進んで結論に至るならば、本研究は、従来 of 中国の民族論に対して、政府と民族の側による想像と創造の共同体であるという新たな観点を提示することになる。これが本研究が挙げると予想される最大の意義である。また本研究では、文献資料と民族側の人々に対する貴重なインタビュー資料を通じて、民族の識別、創造の実態を明らかにして、上の観点を具体的に証明する方法を採用している。筆者が用いているインタビュー資料は、以往の研究者たちには用いられていない独自のものであるばかりでなく、現在すでにかかなりの高齢に達したインフォーマントが自ら語ったものであるため、資料の希少性と一次性の点で高い価値を持つ。この点にも本研究の意義があると考えている。